



とっとり の人形物語

く村を愛する人形浄瑠璃と人形芝居く

も く じ

はじめに…人形に魅せられて…………… P1
人形とっとりロード…………… P2
人形の歴史…………… P3~P4
円通寺人形芝居(鳥取市)…………… P5~P8

新田人形浄瑠璃相生文楽(智頭町) P9~P12
因幡文楽水口人形芝居(八頭町)… P13~P16
これが人形のカラクリ…………… P17
人形のきものあれこれ…………… P18

*はじめに 人形に魅せられて

みなさんは、「文楽（人形浄瑠璃）」を知っていますか？ 観たことがありますか？

この鳥取県では、明治一〇年ごろ約三〇の座があったそうです。しかし、現在は三つの座しか残っていません。このとつとりの人形文化を何とか知っていただきたく、今回この冊子を出すこととしました。

なんで「人形」なのと思われませんか？ 人形が好きになったからです。

私と人形の出会いは二十才のころ。いまから、三〇年以上前のことです。円通寺人形芝居保存会会長宅を訪れたとき、玄関で待っていてくれたのは、美しい「三吉デコ」でした。その神々しさに思わず、見惚れてしまいました。

「三吉デコ」は予祝（祝いをもたらす）の舞をする人形ですから、神々しく映ったのでしょうか。そして、人形芝居のいわれをお聞きし、あらためて、「人」が生きることのその象徴として人形があったことを知りました。

この冊子に出てくる三つの座に共通しているのは、「なんとかい村を創りたい」という村を愛する心でした。そして、私財を投じ、多くの仲間とともに人形の練習をし、衣装を創り人形の座を立ち上げています。人形は三人で一体を操ります。心が一つにならなければ人形が生きません。現在で言う、まちづくり、人づくりが「人形」で行われていたのです。その後、映画やTV等がやはり、人形の文化が衰退していききましたが、「良い村にしたい」との思いを受け継いだ人々が、人形を守って来ました。古いところでは、三〇〇年以上の歴史をもっています。人形をまわす楽しさ、観て楽しんでもらう喜び、大事にしたい人情や義理、人と人との関係が、この人形にあります。また、演じ物のなかには、私たちに、人としてのありようや社会を問うものもあります。

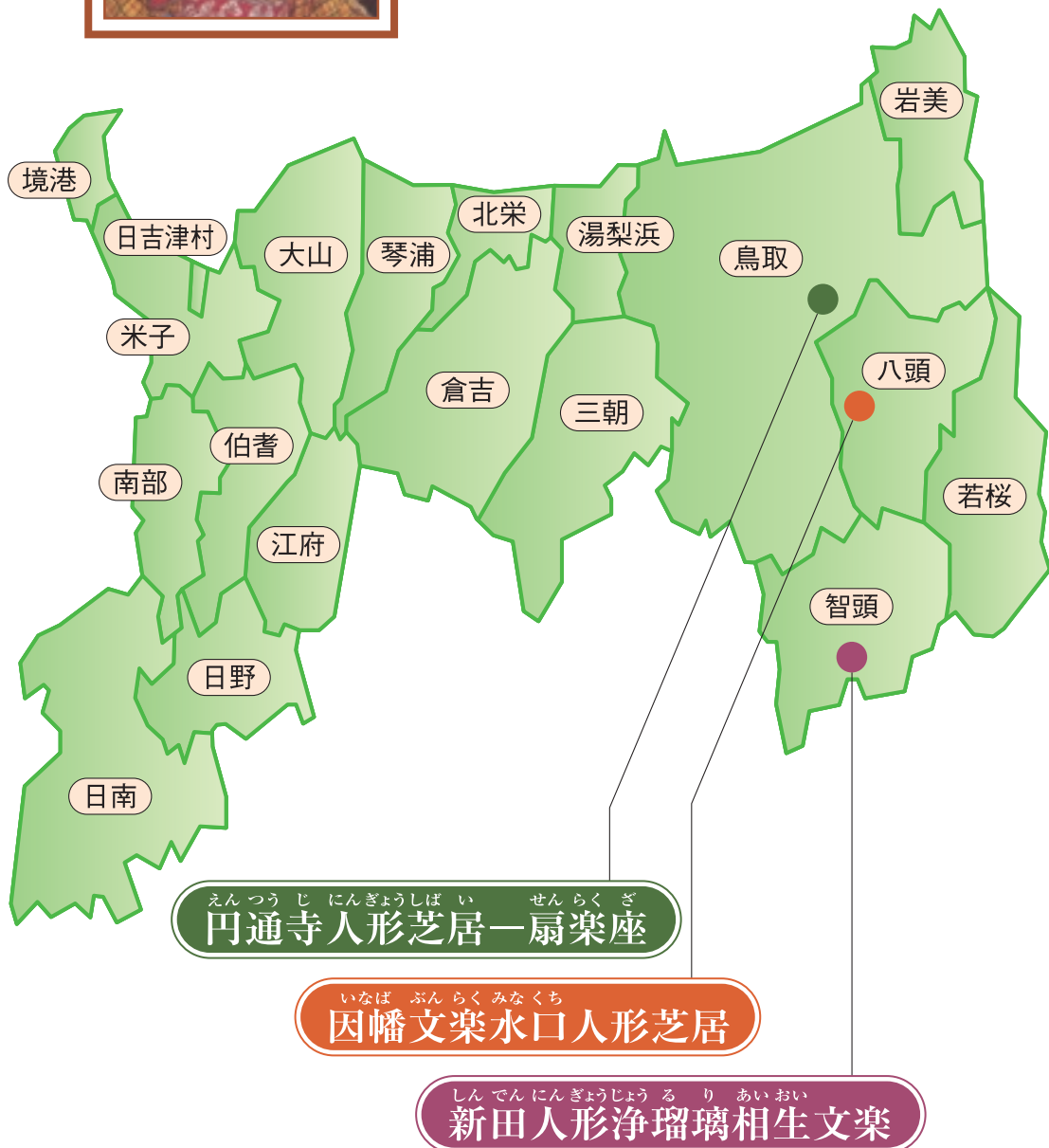
「人形文化」は、大事な人の想いを、人形を操ることで私達へメッセージしています。どんな世の中であれ、未来を創るのは「人」です。なにを大事にして生きるかのメッセージが込められているのではないのでしょうか。

人形浄瑠璃（人形芝居）は、人が生きることを手助けしてきました。そして、人形を見ることで、応援してききました。その思いに触れたから、「人形」から離れられなくなったのかもかもしれません。

さあ、とつとりにしかない「とつとりの人形物語」の世界に、ご一緒しましょう。

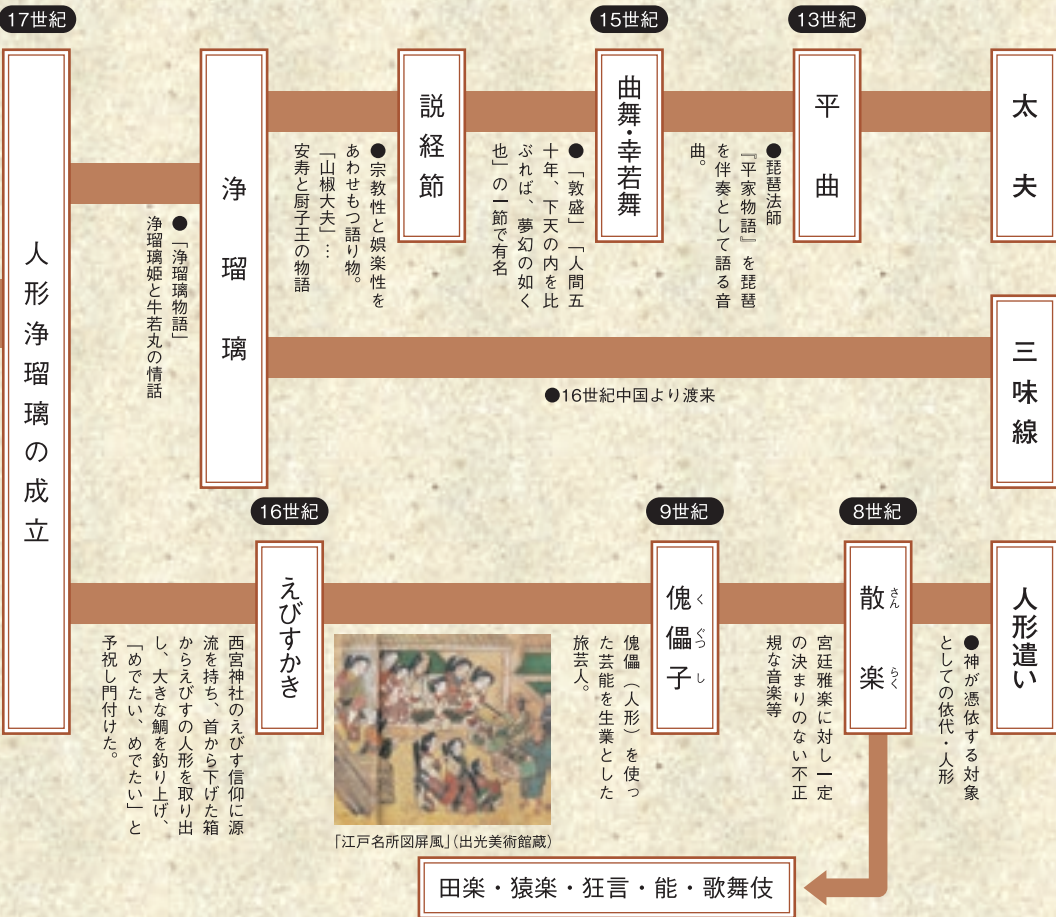


人形とっとりロード



人形浄瑠璃の歴史

人形浄瑠璃は、太夫、三味線、人形遣いの「三業」で成り立っています。左図は、この三業を基にして、人形浄瑠璃の歴史を表したものです。



「江戸名所図屏風」(出光美術館蔵)

◆鳥取における人形浄瑠璃の歴史

鳥取藩主池田光仲の父池田忠雄は、一六一〇年から一六一五年まで淡路洲本藩主で、また母芳心院(三保姫)は、阿波徳島藩主蜂須賀至鎮の娘でした。こうしたことから淡路との交流が盛んとなり、淡路の人形芝居の座は、因幡の地を縄張りとして毎年やって来しました。そのため因幡の人形芝居は淡路の人形芝居の影響を強く受けて成立することになります。

また、多くの農村が賭博により荒んでいく中、幕末から明治初期にかけて健全な村を取り戻そうとする青年が現れ、その礎となったのが人形芝居でした。それにより因幡地方には多い時には約三〇〇の座ができ、日本有数の人形浄瑠璃が盛んな地となりました。

しかし、大正期になると娯楽の中心は活動写真(映画)へ移り、また昭和期にはテレビが普及し、人形芝居は段々と閉鎖されていき、現在は円通寺・水口・新田の三つの座だけになってしまいました。

■道薫坊廻百姓

阿波徳島藩の蜂須賀氏は、淡路を支配するにあたって、人形廻しを生業とする農民である「道薫坊廻百姓」という身分を作りました。淡路の道薫坊廻百姓は因幡地方にも毎年のように訪れ興業を行い、庄屋の家で上演されることもありました。そして、人形浄瑠璃は最も親しまれた娯楽の一つになっていきました。中には見るだけでは物足りなくなり、座を結成していく村が出てきました。さらに、人形師が育つと座の数も増えていきました。

■門付芸

以前は一人遣いで、現在のものより小さく、その頭は目・口・眉も動かない古典的な人形でした。これは、松などの古木の枝の途中に奇形のコブができ、それが人の顔に似たものがあり、傀儡子はこの人形で人形まわしをおこなっていました。

因幡地方では、この人形を「要蔵デコ」と呼び、正月の福を呼ぶ門付けで三味線と胡弓とともに廻され、その愛くるしい姿は正月の風物詩として昭和初期まで愛されました。

●三人遣い

3人の人形遣いが1つの人形を遣う日本特有の人形操法。
主遣い（おもづかい）が首（かしら）と右手、左遣いが左手、足遣いが脚を操作する。1734年竹本座で『芦屋道満大内鑑』が初演されたとき、与勘平の人形に初めて用いられた。

●人形の改良

17世紀後半 足を付けるようになる。
1727年 口が動き、目の開閉ができるようになった
1729年 目玉が動かせるようになった
1733年 指先を動かせるようになる。
1741年 眉毛を動かせるようになる。
その後も、舌・髪を動かせるようにするなどの改良を続けた。

2003年「文楽」がユネスコの世界無形文化遺産に登録

●竹本義太夫（1651年～1714年）

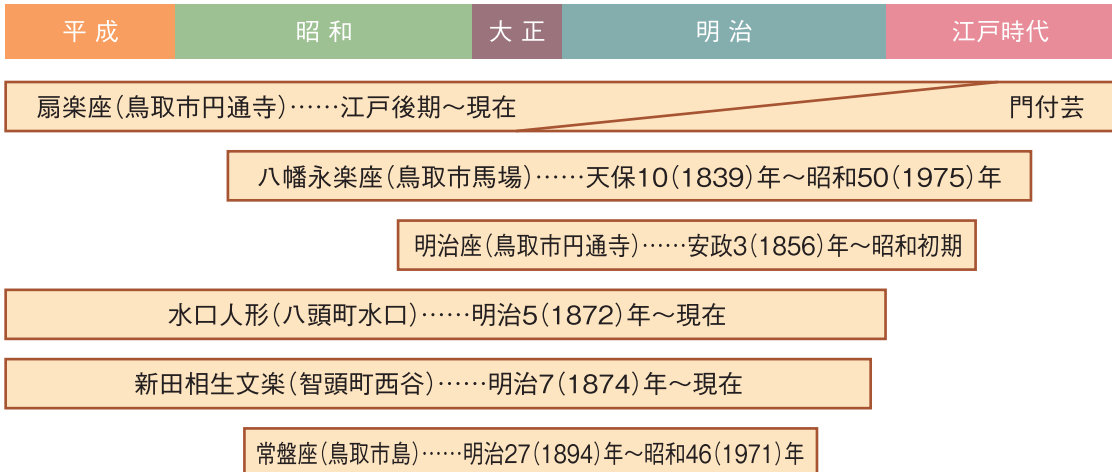
義太夫節浄瑠璃の創始者。
1684年大坂道頓堀に竹本座（座本竹田出雲）を開場。
作家近松門左衛門、三味線弾き竹沢権右衛門、人形遣い辰村八郎兵衛らと組んで新浄瑠璃を展開。

●近松門左衛門（1653年～1725年）

1685年『出世景清』 新浄瑠璃を生み出す
1703年『曾根崎心中』 世話物の始まり
1715年『国性爺合戦』 以後も多数を執筆

●植村文楽軒（1751年～1810年）

人形浄瑠璃文楽座の始祖。
淡路の出身で、1805年高津新地に小屋をたて人形浄瑠璃の興行を始め文楽座の源流となった。



●人形芝居の座があった村

鳥取市桂木、大津、桜谷、立川、浜坂、本高、安長、晩稲、畑崎、徳吉、古海、服部福部町左近、蔵見、国府町麻生、河原町佐貫、気高町光元、山宮、山畑、鹿野町鬼入道、青谷町蔵内八頭、八頭町福井、八頭町才代

【参考資料】因幡の人形芝居(松田重雄)、日本の民俗・鳥取(四宮守正)、ふるさとの素顔(四宮守正) 円通寺人形芝居調査報告書(鳥取市教育委員会)、生きている人形芝居(永田衛吉) 人形浄瑠璃の歴史(廣瀬久也)、人形浄瑠璃史研究(若月保治)、江戸名所図屏風 大江戸劇場の幕が開く(内藤正人)、独立行政法人日本芸術文化振興会文化デジタルライブラリー 馬場八幡人形芝居道具調査報告書(鳥取県教育委員会)

❖ 因幡の人形浄瑠璃の座

円通寺人形芝居——扇楽座

人形芝居の由来

人形浄瑠璃は、古海河原（現在の千代橋東側河原）や神社・お寺等で興行されるようになり、中には庄屋たちが自宅や村内の広場で催すなど、農民・町人にまで浸透していきました。

しかし、幕府や藩は遊行にふけるあまり農作業等に支障が出るのを恐れ、寛政一一（一七九九）年には各種の興行が禁止されるようになりました。

これに対し、農村においては、人形芝居が唯一の娯楽といつてよく、皆を楽しませたいという思いで人形芝居の座を立ち上げる村がありました。その中の一つが、円通寺人形芝居「扇楽座」でした。

円通寺人形芝居は、農閑期に村から村へと巡業を行い、「円通寺節」「円通寺の大黒舞」として有名となり、各地から招かれるようになりました。

特に冬場は、雪の無い時は大八車で出かけましたが、雪が有る時は皆で担いで村まで歩いていき、村々の期待に応え、人々を喜ばせていきました。

円通寺念力節の由来

円通寺念力（がんだりき）節は約四〇〇年前に作られ、次のように

云われています。

慶長五（一六〇〇）年関ヶ原の戦いによって鳥取城主となった池田長吉とその後姫路から転封されてきた池田光政により、それまで山城しかなかった地に、城と城下町を整備する大掛かりな工事がなされ、多くの人々がかりだされました。この時、円通寺の人々は城郭整備のため八坂山周辺から石を切出し、山白川で運搬する大変厳しい仕事に従事させられました。その時に、彼等を慰め励ましたのが唄でした。それは、「奴の念力岩でも通す」といった恨み節でした。この唄は、念力節、石切歌、岩石節ともいいました。当時は、石切の歌詞もありましたが、今は曲のみが伝わっています。

この曲を人形芝居に取り入れたのが初代座元藤右衛門でした。当時、村の人々は、日々厳しい労働と重い税によって苦しい生活を送っており、彼等を慰めるものは酒・博打といったような安易な慰安でした。藤右衛門はこのような村の有様をながめ、何とか健康的で文化的な娯楽により健全な村造りをしたいと思うようになりました。そして、農閑期に唄と人形芝居を始めることにし、私財を投じて人形や衣装を次々に作って行きました。

人形芝居は、村全体の娯楽に発展し、健全な村造りの基が出来、そのうち近隣の村々の招きに応じて出演する域にまで飛躍的に発展していきました。

初代藤右衛門は、美声の持ち主で、彼の節まわしに観客は酔い、円通寺人形芝居の名は遠くまで知られるようになっていき、「扇楽座」と名乗って、但馬・作州まで呼ばれるようになり、今日の基を

つくったのでした。

■ ■ ■ 円通寺人形芝居の特徴 ■ ■ ■

円通寺人形芝居は、三味線・胡弓・太鼓の伴奏にあわせて大夫が念力節を唄い三人遣人形で構成されています。三つの楽器による囃は珍しく貴重な存在です。

念力節は七七調からでき
ており、一説を唄っては三味
線・胡弓・太鼓の合いの手が
入り、唄と伴奏が交互に繰り返す切節で、躍動感があり明るさをもっています。

一般的な三番叟の形式をとらず、念力節による美しい女形の「三吉デコ」を操ることからはじまり、文楽以前の古典的庶民芸術としての古い形式を残しています。

その後は、「平井権八」や口説物などを演出され、途中に行われる中狂言は必ず大黒舞が演じられます。

かつては、「奴の念力岩でも通す」と太夫が謡い「扇楽座」が来たことを告げ、人形芝居が始まりました。



■ ■ ■ 三吉デコ ■ ■ ■

芝居の一般的演出として最初に三番叟を出すのが普通ですが、円通寺人形芝居は「三吉デコ」による念力節から始まります。小唄物から始める操人形の演出方法は他に例を見ません。

以前の「三吉デコ」は小ぶりで一人遣いの粗末なデコでした。現在の「三吉デコ」は、目も口も眉も動きませんが実に美しい三人遣いの女形のデコを使っています。

「三吉デコ」の名前の由来にはいろいろな説が伝わっています。が、右手に馬の頭を持ち「春駒」を舞っている姿から、馬子の三吉が想像されます。

■ ■ ■ 円通寺扇楽座の出し物 ■ ■ ■

【大黒舞】

もともとは門付け芸として正月に門口に立ち、祝いのことばを歌いながら舞っていたものを人形芝居に発展させたものです。

「円通寺大黒舞」では旦那と要造との掛合いが筋立ての中心となり、途中に台詞を挟みながら、楽しい雰囲気祝いの詞を述べていきます。

【平井権八】

十八歳の寛文一二（一六七二）年秋平井権八は、父正右衛門を侮





辱した同僚本庄助太夫を斬殺して江戸へ逃亡しますが、吉原の傾城小紫がいる三浦屋に通うため辻斬りをするようになり指名手配されます。その後母に会うため東昌寺で虚無僧になり郷里鳥取に帰ってきますが、すでに死去していたため自首します。

円通寺人形芝居では、江戸での仕官をめざすため鳥取を出立し、その道中での活躍を演じます。父や母への想い、正義とは何かを問いかける芝居です。

《上演されていた演目》

【佐倉宗五郎】

佐倉藩公津村惣五郎は藩主の苛政を將軍に直訴した。その結果、藩主の苛政を將

なつた。その後、惣五郎は堀田氏に崇り、堀田氏は改易となつた。

【志賀の団七】

奥州白石郷における農民お杉・信夫婦妹による仇討物語

【俊徳丸】

河内佐賀領郡藤沢村で継母に追出された俊徳と和泉横山長者娘初菊の物語

【阿波の鳴門】

阿波徳島の玉木家のお家騒動。巡礼姿の娘お鶴に母お弓が親子の名乗りができないで別れる八段目「巡礼唄の段」が有名。



【京都心中】

三条町糸屋娘おせつと番頭頭清左の心中物語など十五演目

円通寺人形芝居の人形

円通寺では、太夫・三味線・胡弓・太鼓・心遣（主遣）・左手遣・足遣の七者が一心同体となるかによって人形が、単なる人形に終わるか、生ける人間化するか芸術的品位を決定します。円通節・胡弓・太鼓・三味線の四者の息吹によって、人形はさながら生ける人間の如く感情を表現し、観客に感動を与えるのです。

七者の演出は全国的に独自の存在で、農村芸術的文化財として至宝的存在です。

要造デコ

松の枝に自然にできる大きなコブのことを「マンメツ」と言いそれを人形の頭として昔は使っていました。ひよつとこ面のように醜い中にも可愛らしさがあり、あどけないところもあって、狂言に使うには実にふさわしいものでした。木で造られているので「木造（きんぞう）」とも呼ばれていました。それがいつのころか「要造」と転化し、「要蔵デコ」は粗末なデコの代



名詞となっていくきます。文楽では、「ツメ人形」と言っているものです。

要造デコは本高の中尾氏もとかが作り、六角屋ろっかくやで売られていました。

要造デコが出演すると、変な顔をしているのに真面目なことを語るのので、子供と言わず大人までも爆笑し、罪のない要造デコの素振りに、拍手喝采が送られました。

円通寺人形芝居の歩み

文化財指定・表彰

江戸時代後期

扇楽座結成

昭和二七年

「保存会」結成



昭和五九年

鳥取県指定無形民俗文化財

昭和六〇年

国選択無形民俗文化財

(記録作成等の措置を構ずべき無形の民俗文化財)

平成三年

「人形芝居伝承館」建設

平成六年

地域文化功労者文部大臣賞

平成十九年

鳥取県文化功労賞

平成二五年

エネルギー伝統文化賞

円通寺人形芝居の系図

初代	藤右衛門 常左衛門 勘左衛門 松右衛門 以下不明	二 代	藤右衛門 (二代目) 為右衛門 元右衛門 多三郎 宇三郎 以下不明	三代	藤右衛門 (三代目) 重十郎 為三 善右衛門 為左衛門 信左衛門 杉左衛門 以下不明	四 代	西村秀太郎 秋山長平 山口豊三郎 森下久五郎 西村定次郎 西村峰次郎 山口新次郎 磯部平助 山口藤蔵 谷口千松 西村甚之助 秋山為之助 以下不明	五代	西村甚七 秋山為太郎 森下惣市 谷口千代蔵 山口勝蔵 坂本石蔵 坂根石蔵 中山吉蔵 谷口滝蔵 秋山勝治 西村鉄実 山根松蔵 森下喜代蔵 大谷朝次郎 以下不明	六代	西村清市 西村三郎 西村秀菊 秋山数一 山根常次郎 坂根義武 坂根忠秀 森下兼男 秋山辰雄 秋山秋則 松本憲一 森木良一 西村千代子 松田あきの 西村みち子 秋山清女 西村きよ子 磯部八重吉 西村しず子 松本なつ子 国本勇 秋山博	七代	西村一重 西村俊雄 森下秀実 西村勝 磯部正義 坂本正光 山根健一 井上百合子 森下照子 磯部千代子 中島佐代子 山本春江 坂根政代 竹ノ内司修
----	--------------------------------------	--------	---	----	--	--------	--	----	--	----	--	----	---

【連絡先】

円通寺人形芝居保存会 会長／西村一重

鳥取県鳥取市円通寺九〇三 ☎(〇八五七)五三一〇七三三

新田人形浄瑠璃相生文楽

人形芝居の起り

長い間の武家政治から百八十度転換した明治初期の頃は人々の動揺はなほ大きく、この地方の青年も安易な慰安を求め、賭博などの流行により一夜の内に田畑山林等を失う者さえでてきて、村人は不安な生活を送っていました。

新田村の青年岡田太平治等はこの現状を憂い、健全な娯楽を導入して平和な村造りをしようと考えました。

明治六年（一八七三）氏神の社殿改築があり、その警護として青年による夜籠りがありました。その席において、箒・団扇等に頼かむりをさせて淡路の人形遣いをまねる者がいました。この淡路の人形浄瑠璃芝居は、当時この地方に毎年のように巡業に来ており、人々の最も楽しみにしているものでした。この内容は人情味豊で、その底流には道徳的人間性が流れていました。人形をつかうには人々の協力と和が必要なことから岡田太平治等はこれに目をつけ、相談の上導入を決め、私財を出し合って二、三の人形頭を買い求め、第一歩を踏み出したのが、明治七年（一八七四）旧正月の事でした。

成長する人形芝居

その後青年ばかりでなく多くの村人も加わり、岡山県大原町の池

上三郎を招き義太夫と人形遣いを習い、又岡山県の八田村人形座を迎え練習に励みました。

岡田伊平次は、人形頭作りを研究して次々と制作し、各種の演出に使用しました。現在尚使用できる物が十数個残っています。

舞台装置・大小道具等は村人の手によって揃え、衣装は女たちによって仕立てられ、阿波頭も購入して、村ぐるみの一座となり「相生会」と命名されました。

賭博等の悪習も何時しか消えて、当初の目的は達せられ、村に明るい灯がともされました。

明治・大正と次第に隆盛をたどり、八頭郡内・鳥取方面は元より、岡山県内にまで度々招かれて公演するまでに成長しました。

上演する演目

以前は四十三演目くらい演じていましたが、現在では次の四演目です。

- 一 絵本太閤記十段目 尼崎之段
- 二 傾城阿波の鳴門 巡礼唄の段
- 三 壺坂観音霊験記 沢市内の段
- 四 寿式三番叟



新田の人形浄瑠璃芝居は、どれも自分を犠牲にして人のため、世の中のために一生懸命尽くすそんなストーリーのものが多くです。他人を守るために自分の子どもさえ犠牲にする、そんなものもあります。

毒が入っているのが解っていないながら、自分の子どもに毒見をさせる母親など、親が子どもを犠牲にするもの（伽羅先代萩、御殿の段、玉藻前旭日之など）もあります。

人形芝居の盛衰

昭和七年（一九三二）徳島県三好郡昼間町人形座「箱廻し」の泉谷錦枝（治平）及びその弟夫妻が巡業でやってきた。その卓越した技術に感動し、請うて三ヶ年に亘り指導を受け、その間人形の胴作りも教わって人形の改良にも務めた。また同氏の斡旋により有名な阿波の天狗久の人形頭を購入し、衣装は京都より購入、舞台建具は芦津村武田万蔵により新調し面目を一新しました。

昭和十年鳥取市「えびす座」で開催された「因伯素人演芸会」に出演し、最高点で優勝し深い感銘を与えました。

「相生会」を永久に維持しようと座員一同で励まし合い、よりよき後継者を作りたい念願していた昭和二六年（一九五二）秋、大阪の「文楽座」が鳥取に公演にやってきた。楽屋に控えていた桐竹紋十郎氏（人間国宝）を訪ね経緯をはなし、翌年から二年間手を取っての指導を受けることができた。この後同氏から「相生文楽」と称する様にと幟二本を贈られ、会員一同深く感激しました。

昭和五二年には智頭町の有形民俗文化財として、天狗久頭十個など計十二個の頭が指定された。

昭和四十年代後半より若者は村を離れ、村外に勤務する者が増えていき、人形に対する関心も薄れていき、公演も減っていききました。

平成七年に人形・衣装・大道具などの収蔵施設「新田人形浄瑠璃の館」を、平成十一年には公演・展示施設「清流の里」を建設し、村ぐるみ総会員として再出発しました。



傾城阿波の鳴門（けいせいあわのなると）



絵本太閤記（えほんたいこうき）

《従来上演していた演目》

- 一 一ノ谷嫩軍記三段目熊谷陣屋ノ段
- 二 玉藻前旭袂三段目道春館ノ段
- 三 絵本太閤記十段目尼ヶ崎ノ段
- 四 菅原伝授手習鏡四段目寺子屋ノ段
- 五 御所桜堀川夜討三段目弁慶上使ノ段
- 六 伽羅千代萩御殿政岡忠義ノ段
- 七 奥州安達原三段目袖萩祭文ノ段
- 八 艶姿女舞衣三勝半七酒屋の段
- 九 朝顔日記宿屋ノ段切大井川
- 十 三十三所花ノ山壺坂靈驗記沢市内ノ段
- 十一 傾城阿波の鳴門八ツ目巡礼歌ノ段
- 十二 三十三間堂棟の由来三ノ切平太郎住家ノ段
- 十三 伊賀越道中双六六ツ目ノ切沼津里ノ段
- 十四 賀々見山旧錦絵又助住家ノ段
- 十五 箱根山靈驗記暨仇討滝ノ段
- 十六 仮名手本忠臣蔵本能寺ノ段



新田人形浄瑠璃の館

■■■ 新田相生文楽の歩み ■■■

一八七四年	明治七年	人形浄瑠璃芝居「相生会」を創立。
一八八一年	明治十四年	岡山県大町座・鳥取大黒座に出演。
一九三三年 一九三三年	昭和七年 昭和九年	徳島県三好郡昼間町人形座「箱廻し」の泉谷錦枝（治平）及びその弟夫妻に三ヶ年に亘り指導を受ける。人形の改良にも務めると同時に有名な阿波の天狗久の人形頭を購入する。衣装は京都より購入、舞台建具は芦津村武田万蔵により新調。
一九三六年	昭和十年	鳥取市「えびす座」で開催された「因伯素人演芸会」で最高点で優勝。
一九五三年 一九五四年	昭和二七年 昭和二八年	桐竹紋十郎氏（人間国宝）の指導を受け、「相生文楽」に改名。
一九五四年	昭和二九年	相生会創立八十周年祝賀興行。
一九五七年	昭和三二年	杉・桧の造林を行い資金に備える。
一九七七年	昭和五二年	智頭町の有形民俗文化財として、天狗久頭十個など計十二個の頭が指定。
一九八二年	昭和五七年	鳴門市文楽人形師、大江巳之助氏に頭の修理依頼。
一九九五年	平成七年	人形・衣装・大道具などの収蔵施設「新田人形浄瑠璃の館」を建設。
一九九九年	平成十一年	公演・展示施設「清流の里」を建設。

新田相生文楽の系図

初代	岡田太平治 岡田源次郎 岡田政次郎 岡田伊三郎 岡田国蔵 早瀬常蔵 藤原仙吉 藤原宇太郎 藤原長太郎 岡田利平 不明六名
二代	岡田熊之助 岡田音八 岡田関作 岡田亀太郎 岡田勝治 岡田豊治 藤原房五郎 萩原藤吉 早瀬常蔵 不明五名
三代	早瀬源吉 岡田勝治 岡田豊治 岡田富治 岡田康治 岡田忠六 岡田栄治 岡田正 岡田熊之助 藤原信治
四代	早瀬俊夫 岡田小三郎 早瀬源吉 岡田茂 岡田平六 藤原信次 藤原富次 岡田康次 岡田忠六 岡田栄治 岡田正 岡田啓一 藤原信治
五代	岡田小三郎 早瀬俊夫 岡田啓一 岡田仲弘 岡田国雄 藤原毅 岡田史郎 藤原進 岡田和彦 岡田功一

文化財指定

昭和五二年、智頭町有形民俗文化財に天狗久頭十個など計十二個の頭が指定



清流の里

【連絡先】

新田人形浄瑠璃芝居相生文楽 代表者／岡田 一
鳥取県八頭郡智頭町西谷六二〇一 電話 (〇八五八)七五一一九九四

因幡文楽水口人形芝居

人形芝居の起り

八頭郡船岡町水口には、江戸時代末期に個人が操っていた人形芝居がありました。

明治になると、全国的に流行していた賭博が、水口でも盛んになり、一夜のうちに山林・田畑・宅地が人手に渡るなどして、村民の間は殺伐とし、不安な気持ちで暗い生活を暮らしていました。

そのような中、青年山本安次郎は、何とかして文化的な娯楽で村の更生を図りたいと日々考えていました。

明治五年（一八七二）安次郎は、村の青年同志と健全な村造りと生活改善について語り合い、その結果、健康にして文化的な娯楽は、個人で行っていた人形芝居を村のものとして取り入れる事がよいと意見の一致を見ました。それは唄によって精神を高揚し、三味線によって心の清浄を図り、人形の舞によって人情の機微と気品を養えると考えたのでした。

青年たちは農閑期を利用して、鳥取市本高の人形師を訪ね頭を注文し、村の女達に衣装造りの応援を頼み、円通寺の扇楽座に芝居の手ほどきを受けました。

この取り組みは村民こぞっての運動となっていき、村に明るい光を差し込みました。

二年余りの厳しい練習に耐えた後に、村民に人形芝居が披露されました。その熱演に村民は大きな感動を受け、われる様な拍手が起

こり、共に心から喜び合いました。

その後他村へ噂が広がり、招かれるまでに至るのです。

しかし、日清戦争後に気風がゆるみ、再び賭博が流行し、人形芝居から離れる青年が増えていきました。この様子を山本定藏たちは大いに嘆き、同志を集め先輩の努力によって成立した人形座の再興を話し合い、健全な村風を取り戻すことを誓いました。

明治二九年鳥取市馬場の八幡水楽座を訪ね、村の事情を語り指導を懇願すると、馬場の人たちも快く引き受けてくれ、人形の操り方、三味線による浄瑠璃の唄を伝授されました。

明治三〇年頃には一座の名声も広く伝わり、但馬・作州にまで招かれ、大正期に黄金時代を迎えます。



傾城阿波の鳴門巡礼歌の段の一場面

水口人形座の出し物

水口人形座が演出できる演技は、最盛期には十七、八種類を演出

していません。現在では数種類しか残っていません。その内で得意中の出し物は、

- 一 壺坂靈験記
- 二 傾城阿波の鳴門巡礼歌の段
- 三 絵本太閤記



水口座に残る人形頭



水口人形芝居には、鳥取市本高造りで大ぶりの頭が八個ほどと、淡路物の文楽系統の小ぶりの頭が二十数個残っています。鳥取市本高造りのうち五つの頭は、文楽の倍ほどもあります。文楽の頭ほど精巧でなく大らかな造りです。残りの三個の小さな頭は子供と老婆の頭で、文楽の頭の半分ほどです。素朴でどけない造りで、愛情が湧く可愛さを宿しています。この八個の頭は文楽作りとは異なり、目・まゆげ・口は動きません。江戸時代の先覚者によって作られたこれらの頭には、人形師の魂が籠っており、見る人の心を引き付け、大きな感動と暖かい感銘を植え付けてくれます。

水口人形芝居の衣装

衣装は、文楽系統の金襴きんらん・緞子とんすのあでやかな歌舞伎かぶき衣装ではなく、いわゆる民芸的なものです。

当時の武士・町人・農民などが着ていたものを、村の女たちが苦心し、精魂をこめ、一針一針縫いあげた誠意こもる衣装となっています。

土の香りがするこれらの衣装は、江戸末期から明治初期の裁縫・手芸などを知ることができ、衣服の変遷史や民俗学的にも大変貴重な文化財です。

水口人形芝居の系図

初代	二代	三代	四代	五代
山本安次郎 岸本幾三郎 柿田新六 佐々木熊蔵 谷本菊蔵 岸本 以下不明	山本定蔵 岸本増蔵 高木勝太郎 岸本義男 以下不明	谷口義正 山本定男 岸田新一郎 岸田静雄 高木純一 小林昭 小林充 岸本万寿夫 佐々木秀雄 以下不明	山本義聡 谷口義正 岸田静雄 高木純一 小林昭 小林充 岸本万寿雄 佐々木秀雄	山本正弘 高木正弘 舛田美穂子 小林孝子 岸本孝勇 蓑田信孝 岸本久雄



水口座の歩み

江戸後期		個人での人形芝居を始める。
一八七二年	明治五年	「水口座」を結成。円通寺「扇楽座」から指導を受ける。
一八七四年	明治七年	村での上演を成功させ、他村でも招致される。
一八九六年	明治二十九年	日清戦争後再び村の風紀が乱れ、人形芝居の再興により村風を取り戻そうと、「永楽座」の指導を受け、文楽系統へ転向。
大正期		但馬・作州から声がかかり、黄金時代を迎える。
	昭和三〇年頃	戦争により人形芝居は忘れ去られていたが、文化遺産であることを再認識し、船岡町が人形修理を予算化し、座員も復活のため練習に励む。
一九六一年	昭和三十六年	「水口座」復興公演。
一九八七年	昭和六二年	鳥取県「地下おこしコンクール」知事表彰
一九九七年	平成九年	鳥取誇り百選に入選
一九九八年	平成一〇年	「水口でこ館」落成。
二〇〇四年	平成一六年	八頭町指定無形民俗文化財
二〇一四年	平成二六年	日本海新聞ふるさと大賞

水口座の口上

① 東西東西 カチカチ（拍子木）

本日水口人形芝居因幡文楽をおまねきいただき 不弁舌なる口上をもってお礼申し上げます。

のみ持つてケンケンと下駄の歯替えも職人のうちみそさんざいも 鷹のうち

いとばのねぶ（小魚）でも とと（魚）のうち

せんちも棟長屋 禪の裁ち祝いと申し

我々とても 芸人のうち

あまた芸者が入れかわり 立ちかわり

枯れ木も山のにぎわかし 節と言ったらねぶかぶし

本日演じまする芸題は「阿波の鳴門、阿波の鳴門の八段目巡礼歌の段」

見物人の皆様様に お目にかなう事はできませんが

千が一にも万が一 お目に止まった其の時は

良い良いのお手拍子 すみからすみまで おん願い申し上げます

カチ カチ カチ（拍子木）

デンデンデン と三味線で始まる

② 東西東西 カチカチ（拍子木）

ここもとあいつとめまする浄瑠璃の段

絵本太閤記 絵本太閤記

語ります太夫 竹本錦 竹本錦

三味線 鶴沢隼糸 鶴沢隼糸

いーよ いよ 絵本太閤記十段目 尼崎の段

どなたも さよう カチ カチ カチ（拍子木）

■■■ 文化財指定・表彰 ■■■

昭和六二年 鳥取県「地下おこしコンクール」知事表彰

平成十六年 八頭町指定無形民俗文化財指定

平成二六年 日本海新聞ふるさと大賞



【連絡先】

因幡文楽水口人形芝居保存会 代表者／山本 聡

鳥取県八頭郡八頭町水口二二三 ☎(〇八五八)七三一八二〇七



これが人形のカラクリ

■人形のかしら

地域や人形座によって違いがありますが、目尻のところが「角目頭」は立役（善人）、目尻の丸い「丸目頭」は敵役（悪人）に使われます。

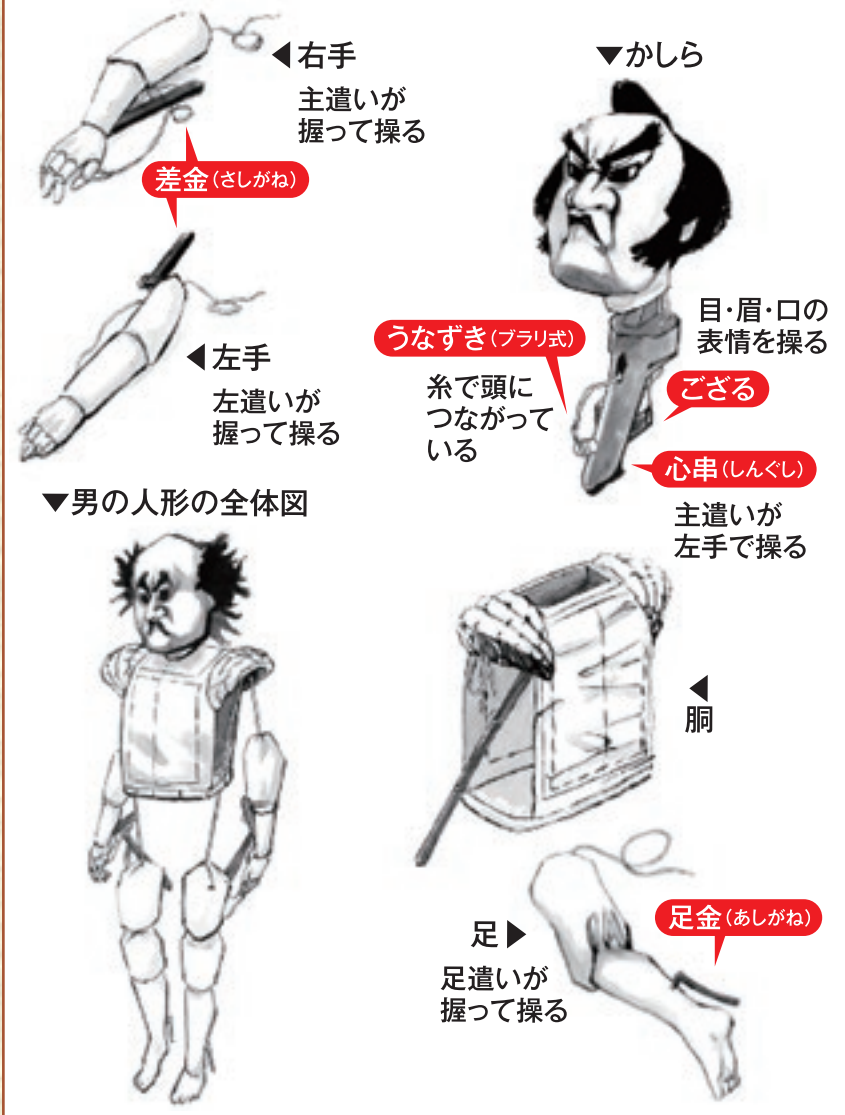
未婚の女性は「娘頭」で、細い眉が墨で描かれ、口元から白い歯がのぞきます。

既婚の中年女性は「女房頭」で、剃られた眉が青で描かれ、お歯黒。老女は「婆頭」呼ばれ、白髪で深いシワが刻まれています。

このようなかしらの決まりごとを知ると、登場人物の役割や本性が推測できて、人形浄瑠璃の楽しみ方が深まります。



人形のしくみ



人形のきものあれこれ

見て、人形の衣裳

人形芝居を見ていて、気になるきものはありますか？

太夫・三味線弾きは袴袴、人形遣いはまつ黒ですね。

では、人形はどうでしょうか？

時代劇と同じに見えますが、ずいぶん工夫してあるのです。柄や色もなんでも良いわけではありません。

きものの形

人形のきものの肩の幅は、人のきもののほぼ半分です。丈はそれぞれの座によって違います。きものは洋服と違って、平らな布を胴体に巻き付けて帯でとめるので、人形が変わってもきゆうくつになりません。

また、背中には、大きなたて穴が開けてあります。手を通して人形の頭を操るためです。

この他にも、袖のたもとや脇を広く開けている座もあります。

色や材質は役柄を表す

芝居の演目は、江戸時代に作られたので、色や材質や柄は、当時の社会のきままりをとどめています。例えば、年令・結婚しているかによって袖の長さや色使いが違います。町娘・武家の姫・女房・遊女など、帯の結び方や襟が違います。金糸を使った織物は地位の高い役柄に、茶色や藍色（濃い青色）の格子や縮柄は庶民に使われます。三つや五つの紋所がついたきものは、武家や商家の主人・夫人に使われました。武士は袴、地位の低い家来はもんぺ袴ですが、町人は袴を許されませんでした。



徳島県阿波木偶箱まわし保存会

赤色は、子供やお姫様によく使われる色です。赤は体を温めたり、風疹という子供の病気をなおしてくれたり信じられていたからです。もし人形を、人間が着るように、二・三枚重ねて着せつけると、重たくなって操作しにくくなります。そこで、肩に細いきれを針などでとじつけ、重ね着しているようにみせています。

また立役（男の人形）が袴をはく場合、下のきものの裾は短く切っており、操作のしやすさや節約など、見えないところに工夫があります。

しかし、明るい赤色は、紅花という高級な植物で染めるので、ぜいたくとみなされ、庶民が表に着るのは許されていませんでした。

一方、神様に豊作や平和を祈る演目では、江戸時代よりも昔からあった袖の広い狩衣や直垂を着せま

す。特に白地に鶴亀松竹のおめでたい柄を手描きで表

したものは、清浄な白地に最も素朴な技法が良いとす

る日本古来の信仰にもとづいています。豪華やささい

ばかりが良いものではありません。



新田相生文楽

昔の衣裳が残っている

かつて鳥取には、農閑期に、娯楽として、地元の人々が人形芝居を上演したそうです。鳥取市馬場倉田八幡宮（馬場八幡永楽座・鳥取県指定有形民俗文化財）や鳥取市歴史博物館やまびこ館（嶋人形常盤座・鳥取市有形無形文化財）に伝えられているものは、明治から昭和初期に作られたものです。徳島や淡路島のような商業の座に比べると、金糸の刺繍があっさりしています。が、明るい色で直線や曲線の柄を機械で染めた木綿布が多く見られ、座の人たちが身近な布で修理しながら大事に使っていた様子がわかります。

（文／花房美紀／大学講師）

〈引用／平成二六年鳥取県教育委員会「馬場八幡人形芝居道具調査報告書」〉



【鳥取県協働提案・連携推進事業】

発行日 2017年3月28日

発行 生活文化研究会

鳥取市円通寺903 円通寺人形芝居保存会内

TEL0857 (53) 0713

協力 智頭町新田相生文楽 因幡文楽水口人形芝居保存会 円通寺人形芝居保存会

